

追大をフィールドにして「言葉」を調査する—日本語ゼミの活動報告—

櫛引 祐希子

1 はじめに

2014年度の基礎演習B（以下、「日本語ゼミ」と呼ぶ）は、「言葉を調査する」というテーマで活動した。調査のフィールドは、ゼミ生が学生生活をおくる追手門学院大学である。ゼミ生は自身の関心で質問項目を作成しアンケート調査をおこなう経験を通して、「言葉」や「大学生活」に対する新たな発見をした。

本稿は、追大をフィールドにしておこなった「言葉」に関する調査結果を報告し、その結果を分析したゼミ生のレポートの一部を紹介するものである。紹介にあたり、筆者が言葉の補足や表現の修正をおこなった箇所があるが、基本的には学生の記述をそのまま引用している。

なお、本稿で用いる調査結果は、2014年11月13日（木）の1限「国語学」の時間内で実施したアンケートとゼミ生が個別に回収したアンケートを集計したものである。アンケートは計96名が回答したが、記入漏れが散見され質問項目によって回答数が異なる結果となった。以下で取り上げる調査結果で回答の総数が異なるのは、こうした事情による。

2 言語の変化か？それとも乱れか？

今回のアンケートでは、本来的な意味や用法では使われない「言葉」に関する質問項目を設けた。ここでは特に興味深い結果が得られた「確信犯」と「失笑する」の意味に対する認識、「ら抜き言葉」に対する意識、そして外来語の意味に対する認識について取り上げる。

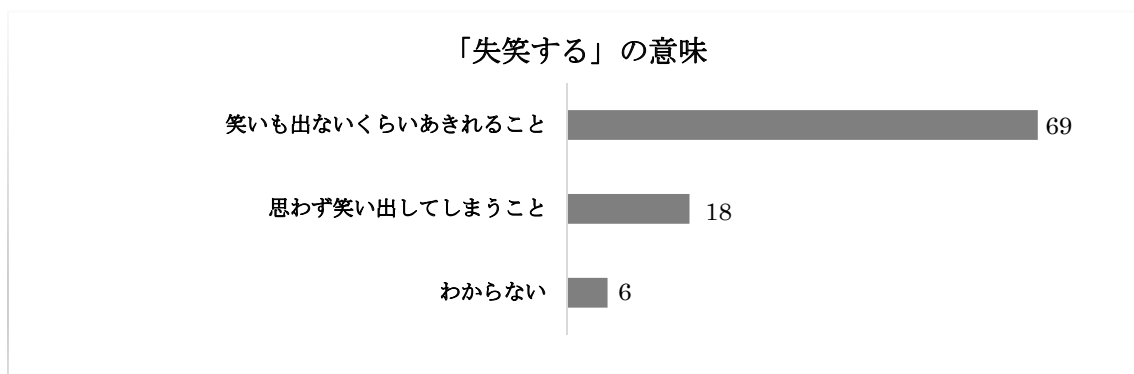
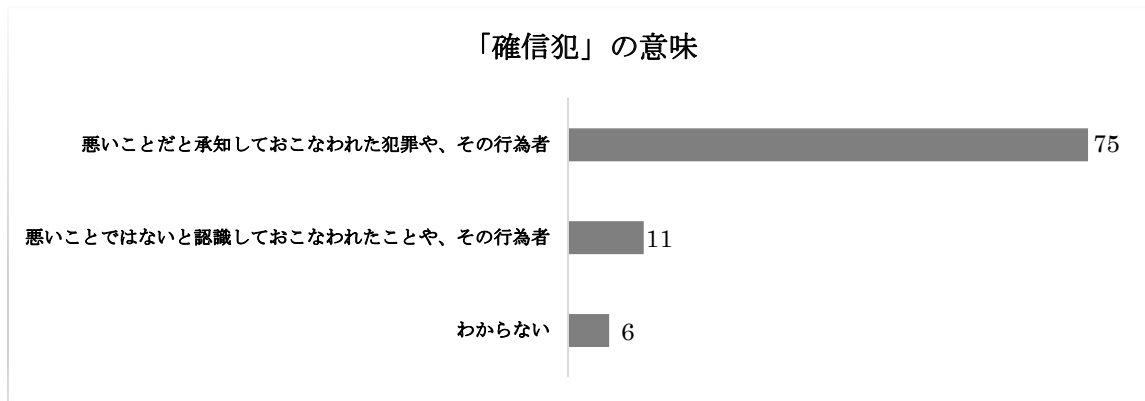
2.1 「失笑する」と「確信犯」の意味

平成7年度からおこなわれている文化庁の「国語に関する世論調査」は、平成14年度に「確信犯」の意味、平成23年度には「失笑する」の意味について調査している（確信犯；http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h14/kekka.html、失笑する；http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h23/pdf/h23_chosa_kekka.pdf）。結果、「確信犯」については57.6%、「失笑する」については60.4%が本来の意味とは異なる意味で理解していることが明らかとなった。

ゼミ生の木村萌は文化庁の調査結果と追大での調査結果（次のページに掲載したグラフを参照）を比較し、どちらも過半数以上が本来の意味とは異なる意味で理解している点に注目して言葉の意味に関する持論を展開する。

今さら元の意味で使いましょうと国が言っても、不可能だと思う。そもそも、誤用し

ていない人が誤用している人に向かって「その言葉、間違っているよ！辞書通りの意味で使おうよ！」と言っても‘ウザイ’と思われるはずだ。意味的に言えば、たとえ間違っても伝わる人の方が圧倒的に多いので問題はない。言葉というものは、ずっと同じ意味のものがあるが、変わるものもある。その時代に言葉を適応させることが良いのではないだろうか。(木村萌)



2.2 ら抜き言葉

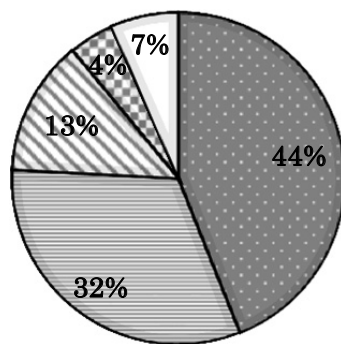
井上史雄 (1998) などで指摘されたように、「ら抜き言葉」は可能表現として定着している。「着る」「寝る」などの一段活用動詞は、本来ならば未然形に助動詞「られる」を接続させ「着られる」「寝られる」のような可能表現を形成するが、この形態は受身表現や尊敬表現^注とも同じである。一方で「ら抜き言葉」と言われる「着れる」「寝れる」のような一段活用動詞の未然形に助動詞「れる」が接続した形態は可能表現に特化し、受身表現や尊敬表現の「着られる」「寝られる」との違いを明確にする。なお、この変化の背景には「読む」「書く」のような五段活用動詞に見られる可能動詞の存在が関係していると考えられている。「読める yom-eru」「書ける kak-eru」などの可能動詞は、子音で終わる語幹「yom」「kak」に「-eru」が添加したもののだが、一段活用動詞の語幹は「着る」なら「着 ki」、
「見る」なら「見 mi」のように母音で終わるため単純に「-eru」を添加することができ

ない（日本語は母音の連続を拒否する傾向がある）。そこで、一段活用動詞が可能動詞化する場合は語幹に続く子音/r/を残し、そこに「-eru」を添加させたかたち、すなわち「着れる kir-eru」「寝れる ner-eru」という、いわゆる「ら抜き言葉」の形態が生じたと考えられる。

さて、日本語の乱れの代表的なものとして扱われることが多い「ら抜き言葉」だが、最近では日本語の変化として肯定的にとらえる見方も増えている。では追大生はどのように意識しているのだろうか。結果は下のようになった。「特に問題ない」と「日本語の変化だと考える」という回答を合わせると約7割以上の学生が肯定的な見方をしていることがわかる。

「ら抜き言葉」についてどう思うか？

- 特に問題ない
- 日本語の変化
- 日本語の乱れ
- 意味がわからない
- 関心がない



新里愛は、「特に問題ない」が最も多い理由として、こちらの方が本来の表現よりも自然に聞こえるという理由と「ら抜き言葉」の何が問題なのかわからない学生が多い可能性を指摘する。また、「ら抜き言葉」が若者言葉として認識されやすい理由についてこう分析している。

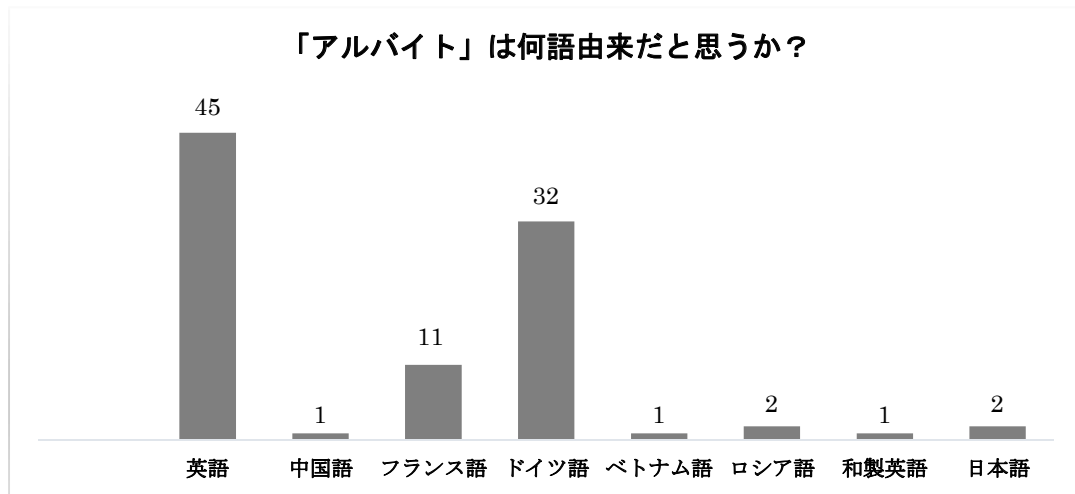
若者語や流行している言葉、またキャンパス言葉には省略した言葉が多い。そしてまた、「ら」を抜くということも省略していることに変わりはない。そのため、「ら抜き言葉」が若者語っぽく、しっかりとした日本語ではないと思われてしまうのではないか。

(新里愛)

2.3 外来語の意味

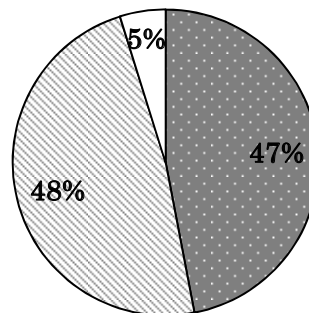
陣内（2007）によれば、外来語は、その使用者が外国語からの単純借用語と意識しているものと和製の外来語と意識しているものに分けられる。アンケート調査では前者のタイプに属する「アルバイト」と「リフォーム」の意味に対する理解について尋ねた。この項

目は下田未沙稀の発案である。「何気なく発している言葉で‘それは日本語だ’‘これは和製英語だ’と区別できる人はそう多くはないはずだ。その言葉の由来や意味を理解して使っているかどうかを知りたい」というのが調査の意図であった。結果は下多の仮説通りになった。



「リフォーム」の意味

■手を加えて作り直すこと ▣家屋の改装のこと □わからない



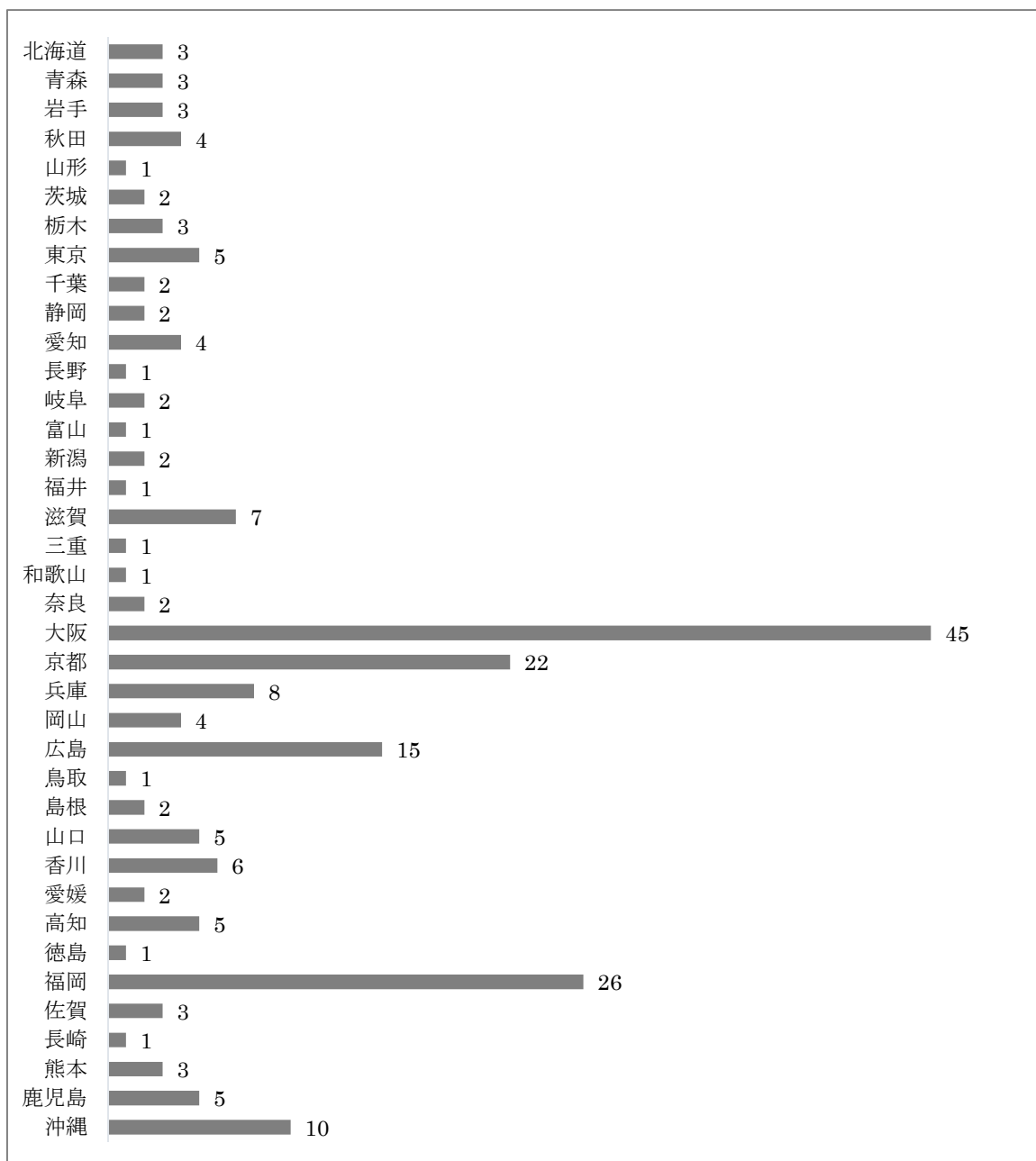
下多は、「アルバイト」を英語由来と意識する割合が多いことと「リフォーム」の意味を日本的意味（家屋の改装という意味）と原語の意味で理解する人の割合が同じ程度である理由について、現代の日本人が英語に慣れ親しんでおり、運用だけでなく意識の上でも「英語化」が進んでいることの現れだと分析する。一方、崔榮斗は外来語が好んで使われることについて、こう分析する。

日本に来た7年前に比べてカタカナで表されている言葉（外来語）がとても増えていることに気づいた。これは、話す時にあるものを外国語で言い換えるとかっこが良い、おしゃれに感じるという傾向があるからだと考える。テレビを見ていると新聞を読んでいると、カタカナ言葉（外来語）が氾濫しているように思う。（崔榮斗）

3 好きな方言について

今回のアンケートの質問項目を選定するうえで多くのゼミ生が調査を希望した質問が「どこの方言が好きですか（複数回答可）」である。下に結果を示す。

好きな方言（複数回答あり）



なお、「宮城・福島・群馬・山梨・埼玉・神奈川・石川・大分・宮崎」は回答がなかった。

上の結果に対して、柳原魁は関西方言が学生にとってなじみ深い言葉であり、福岡方言は最近流行りの「キュンとする言葉」としてテレビ番組でも取り上げられていることを紹介し、福岡方言の独特の言い回しなどを愛らしく思う男性が多いのではないかと述べる。

柳原が言うように福岡方言の人気はメディアで取り上げられており、メディアの影響が

方言の好悪を左右している可能性がある。この点について斎間は自身のルーツである鳥取方言（アンケート調査では1名のみ）の回答）を例に出しながら考えを述べる。

私も鳥取県がもし母の故郷でなかったら、触れ合う機会はあまりなかったかもしれない。メディアなどでよく耳にする方言は、その良さに気づきやすくなるので人気が偏るのかもしれない。触れ合う機会がないために、その地方ごとの方言の良さに私たちは気づいていないのではないだろうか。（斎間葵）

また、臼木正和は、アンケートの回答率に注目した。「方言ブーム」と言われる昨今だが、果たしてそう言い切れるのかと懐疑的な意見を述べている。アンケートの回答率が若者語や外来語に関する質問に比べると低いことと、近畿地方以外の地域の方言に対する関心の低さがその理由である。

一方で杉本あゆみは、相澤正夫（2012）で報告されている出身地域と好きな方言の相関関係と今回のアンケート調査結果を比較した。相澤の「概略、「出身地方言好き」は西日本で優勢、「共通語好き」は東日本で優勢といった明瞭な地域差が現れている。（p30）」という分析を踏まえ、10年経過していても西日本（特に関西）の「出身地方言好き」が変化していないことに注目している。

4 「言葉」の地域差・世代差・男女差

今回のアンケートでは、具体的な方言を取り上げ「言葉」の地域差・世代差・男女差に踏み込んだ調査項目もあった。

4.1 「～はる」の用法

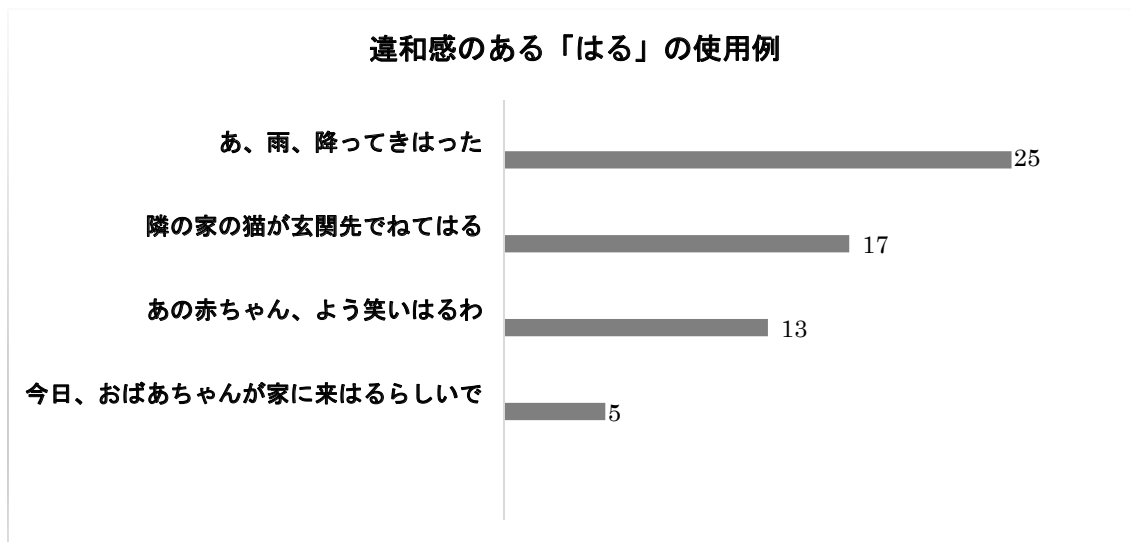
関西方言の「～はる」には地域差があることが知られている。大体的に言えば、大阪では敬意表現としての性格があるが、京都では敬意が逡減した文末表現となっている。アンケート調査では4つの用例に対する違和感の有無を尋ねた。「～はる」を使用する35名中2名がすべての用例に違和感がないと回答した。結果は次のページに示した。

上田千晃は、この結果に対して地域差の視点を加え分析した。結果、次のようなことがわかった。

- ・滋賀出身者4名すべてが「雨、降ってきはった」に対して違和感はないと答えた。
- ・「猫が玄関先で寝てはる」は同じ大阪府内でも南部と北部で回答が分かれた。茨木と高槻出身者で違和感がないという回答が多かった。
- ・「あの赤ちゃん、ようわらいはるわ」に違和感を持つ人は「おばあちゃんが家に来はるらしいで」にも違和感を持つ。

上田は「～はる」を敬語の一種と意識する人は、身内や赤ちゃんに「～はる」を使うことに違和感を抱くのではないかと分析する。また、関西の北部の方が「～はる」の用法が

幅広いことは先行研究の指摘と重なる。



4.2 「おおきに」「ごんた」の使用

宮本慶子は関西の伝統的な方言語彙の中から「おおきに」と「ごんた」の使用と認知度について質問することを発案した。「おおきに」は感謝を表す表現、「ごんた」は「やんちゃ（いたずらっ子）」という意味で、「あんたがこどもの頃はほんまにごんたやったなあ。」というように使われる。

調査の結果、「おおきに」は70人中12人が使用すると回答し、「ごんた」は70人中14人が使用すると回答した。なお、そのうちの13人が「ごんた」を本来の意味で理解していた（他の1名は人名と回答した）。方言主流社会と言われる関西においても、伝統的な方言語彙が若い世代で著しく衰退していることが明らかになった。宮本は仮説通りの結果だと述べ、伝統的な方言語彙の衰退要因として祖父母世代との交流が減少していることを要因として挙げる。

4.3 使用する自称詞について

北川星弥は、追大生が使う自称詞について分析した。日本語の自称詞はバラエティに富み、地域差や性差もある。関西では女性の自称詞として「うち（頭高アクセント）」が使われる。しかし、アンケート調査で男性47名中3名から「うち」を使用するという回答があった。これについて北川は「うちんち（私の家）」「うちの家族（私の家族）」というような表現の「うち」と混同があったのではないかと考察する。

また、今回の調査によると「うち」を使用する女性が28人中9名に対し、「わたし」を使用するのが20名と最も多い数となった。「わたし」は男性でも47名中12名で、「おれ」の33名、「ぼく」の17名について多い。「わたし」という自称詞の使用が男女共に多いことについて北川は学生生活のありように注目する。

大学生生活はそれまでの学校生活と違いが多く見つけられる。教員との距離感にそれぞれで大きく差があったり、レポートを作成したりと改まった場が増えることもその一つである。そういう機会が増えたことにより、この結果に至ったと考えられる。高校生、中学生、小学生にもこの項目の調査を行ってみると、おそらく違った結果をみることができるだろう。(北川星弥)

5 学生生活を彩る言葉

最後に学生生活に直結したキャンパス言葉とアルバイトの言葉、学生だからこそ触れる機会の多い若者言葉と漫画の言葉について報告する。残念ながらアンケートでは回答方法が自由記述だったこともあり、回答数が少ない項目もあった。その要因に関する分析も合わせて紹介する。

5.1 キャンパス言葉

キャンパス言葉は「大学生がキャンパスで使用する学校に関する言葉」(米田 1998) のことである。坂田裕徳は、アンケートで記述されたキャンパス言葉をまとめた。兼築(2003)はキャンパス言葉を「教職員にも通じる言葉」と「学生内でしか通じない(はずの)隠語的な言葉」に分類するが、このアンケート調査の上位は両者が混在している。「阪茨(阪急茨木)」や「J茨(JR茨木)」「ユニパ(ユニバーサルパスポート)」「ゼブラ(ゼブラスクエア)」は前者のタイプだが、「ピー逃げ(学生カードで出席チェックをして授業を放棄すること)」は後者のタイプである。

坂田は、キャンパス限定で使われる言葉ではなく普段の生活で使用している言葉を回答しているケースが多々見られることや、アンケート内容を理解していない回答も少なくなかったことについて、選択式の回答方法にすればもう少し回答率があがったのではないかと予想する。

5.2 アルバイトの言葉

富永拓未は、大学生の多くが経験するアルバイトに注目し、そこではじめて出会った言葉に関してまとめた。その中には「おはようございます(時間ではなく、その日に初めて会った人と交わされる挨拶)」「シフト(勤務表)」のようにアルバイト以外でも使用するが使い方がやや異なるものや、「アニキ(古い方の材料)」「4番(居酒屋でのトイレ)」のように客に意味を察知されないための隠語が多い。富永はアンケートで回答されたアルバイト関連の語彙を整理し、追大生のアルバイトが居酒屋やコンビニに集中していることを指摘する。

5.3 若者言葉

アンケートでは現代の若者語と親世代の若者語の認知度について調査した。調査語彙は「ぷちょへんざ（手を挙げるという意味の「put your hands up」の発音に基づいて派生）」「お疲れピーポー（相手を気遣うときに用いる）」「ゲロカワ（ゲロを吐きそうなほどかわいい）」（以上、現代の若者語）と「テレカ（テレホンカード）」「アッシーくん（女の子を送り迎えする男友達）」（以上、親世代の若者語）である。

「ぷちょへんざ」「お疲れピーポー」「ゲロカワ」は現代の若者語だが、アンケートでは認知度に違いがあり、「ゲロカワ」だけが半数に知られていた。これについて田崎大介は「ぷちょへんざ」は比較的新しいため浸透しておらず、反して「お疲れピーポー」は10年以上前から使用されている古い若者語で死語化しているのではないかと予想する。

一方、押田は親世代の「テレカ」と「アッシーくん」の認知度に違いがある理由を分析し、自分たちが「テレカ」を使った（というよりも、防犯のため家族に持たされた）最後の世代であり、「テレカ」を物として認識しているため「テレカ」の認知度が高いと10人へのインタビュー調査の結果をもとに分析する。一方で「アッシーくん」は現代では「パシリ」と呼ばれ、語の新旧交代が起きた可能性を指摘する。

しかしながら、少ないとはいえ、「アッシーくん」のような親世代の若者語を知っている若者もいる。この背景について押田はこう述べる。

テレビの報道力が大きいがために、私たちの世代（10代後半から20第前半）が普段使うことのない親世代で流行った言葉が、テレビ番組を通じて今の若者たちに伝わりこうした結果を招いたのではないか。（押田光恵）

5.4 漫画の言葉

アンケート調査では「日常的に使う漫画の台詞にはどのようなものがあるか」という質問があったが、非常に回答率が低かった。片山駿はこの理由が「自由記述を面倒に感じたから」「普段漫画を読まないため特に思いつかなかったから」「漫画をよく読むため心当たりが多数あり書ききれなかったから」の3タイプに分かれると推測する。

少ない回答数のなかでも、「海賊王に俺はなる」（2名）「夢はおわらねえ」（1名）など尾田栄一郎の『ワンピース』の台詞が最も多かった。山本貴志によると、冒険しながら戦いを続ける作品だが、そこに感動シーンやコミカルなシーンが散りばめられており男女や年齢を問わず人気を集めているということだ。作品の名言を集めて人気投票するサイトもあるらしい。

伴陽介は、『スラムダンク』の「あきらめたらそこで試合終了ですよ」とワンピースの台詞を比較しながらこう分析する。

主人公ではなくサブのキャラクターが言った台詞は、主人公が言う漫画の代名詞になれるような言葉ではないが、ストーリーの流れや落としどころで使われたものであり、

日常的にはこちらの方がスッと使えそうな言葉であることが多い。(伴陽介)

6 まとめ

以上、基礎演習 B のゼミ生が追大生に対しておこなったアンケート調査結果とゼミ生による分析の一部を報告した。言語分析として未熟な面があるのは確かだが、調査結果に対して真摯に向き合う姿勢には目を見張るものがある。

フィールドワークは海外に行かなければできないというものではない。国内でも可能であるし、普段の生活を営む場所でおこなうことも可能である。今回は「言葉」という視点から追大をフィールドに学生の言語意識や言語生活を掘り下げた。日本語ゼミの学生にとって、自分自身で作成し分析したアンケート調査は、見慣れているはずのキャンパスの景色や学生の様子を今までとは少し違ったものに変えたようだ。こうした発見の醍醐味こそ、机上での学びでは味わえないものだろう。

注 「着る」と「寝る」の尊敬表現には、それぞれ「お召しになる」と「お休みになる」もあり、助動詞「られる」による尊敬表現よりも表明される敬意は高い。

引用文献

相澤正夫 (2014) 「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明 方言意識の現在をとらえるー「2010 年全国方言意識調査」と統計分析ー」

『国立国語研究所プロジェクトレビュー』 Vol.3 No.1

(<http://www.ninjal.ac.jp/publication/review/0301/pdf/NINJAL-PRReview030104>)

井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』 岩波新書

兼築清恵 (2003) 「呼び方・呼ばれ方」 榎本正嗣編 『ことばを調べる』 玉川大学出版部

陣内正敬 (2007) 『外来語の社会言語学 日本語のグローバルな考え方』 世界思想社

米田明彦 (1998) 『若者語を科学する』 明治書院